

原発事故は、我々に何をもたらしたのか?

芽生え始めた議論の場

東海発 大震災 1年を 考 える

8

原発事故がもたらしたのは、「分断」なのか。「放射能をばらまくチロリスト」。昨年9月ごろ、そんな手紙が届いた。定期

で暴力的に「正義」を振りかざせるのだろう」「放射能に汚染された」とされるものと「汚染されざる」ものとの間の深い溝。この分断を解くには、どうしたらいいのか。

汚染の源である「原発」と向かい合うしかない。震災後、これまでとは違った動きが芽吹いた。

市民会議発足



市民団体の萩原喜之さん（前列右端）と中部電力OBの今尾忠之さん（同右から2人目）=4日、名古屋市東区

のだ、と思っていながらは止まらない」
原発を推進してきた側からも参加した。中部電力の元副社長の伊藤隆彦氏は「個人的な意見」と断りつゝ、マイクを握った。「新規エネルギーに軸足を移すにしても時間はかかる。日本全体で考えるべきだ。電力仕掛け人は、市民団体で脱原発やリサイクル運動を取り組む萩原喜之さん（59）と、中部電力OBの今尾忠之さん（68）だ。2人は13年前、子ども向けの環境教室を共催し、接点があった。萩原さんは「自然エネルギーの普及で電気を選べるようになれば原発も止められる。地域のエネルギーと一緒に考えたかった」と振り返るが、ほのかの団体からは「電力会社に取り込まれた」と批判された。10年余り、共同事業は続いたが、脱原発は進まなかつた。
そこに今回の原発事故。4月ごろ、萩原さんは約10年ぶりに今尾さんに連絡を取つた。原発煙を長く歩んだ今尾さんは「私は被告の身」と自嘲氣味に言った。萩原さんは「それなら、電気を使ってきた消費者も

だ」と感じた。

2人は、様々な人たちが立場を超えてエネルギー問題を話し合う場を作ろうと意気投合した。名古屋市でごみ減量に取り組んだ松原武久・前市長にも相談し、1年がかりで呼びかけ人を集めた。だが、実際にどれだけの人が当日集まるのか、不安だった。

会社だけに任せた話ではない

い

立場を超えてエネルギー問題を話し合う場を作ろうと意気投合した。名古屋市でごみ減量に取り組んだ松原武久・前市長にも相談し、1年がかりで呼びかけ人を集めた。だが、実際にどれだけの人が当日集まるのか、不安だった。

うれしい誤算

200人が集まったのは

うれしい誤算だった。しかも半数以上は事前に申し込んでいる参加者だ。終盤、

こんな場面もあった。高校生が「次世代のことを考えようというわりに

は、日先のお金の話にとらわれすぎている」と声を上げると、すかさず「いや、

経済大事。産業がダメになつて就職先がなくなれば困るのは若い世代だよ」と大人から反論が上がつた。

萩原さんは、それでいいと思う。両方とも大事、答える。両方とも大事、答える。両方とも大事、答える。両方とも大事、答える。

萩原さんは「市民会議は、この『議論の場』だ。萩原さんはそう思つてい

る。（兼田徳幸、加藤勇介）

II 終わり